

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7 11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

新校整備は必要最小限にとどめる?!

適正規模・適正配置にもとづく学校建設計画の策定を

府教委 将来推計結果を受けた 今後の対応案を説明

2月14日、府教委は大障教に対し、大阪府域を含む府立支援学校における知的障がい児童生徒数の将来推計(2017年3月発表)結果を受けた、今後の教育環境のあり方についての説明を行いました。今年度の大障教本部交渉で、各校の状況把握も行いながら、新校の設置も含めて平成29年度中を目途に対処案の検討を進めている」と説明した具体的な内容が、ようやく明らかにされました。2月23日に開会された大阪府議会では、大阪府立支援学校における知的障がい児童生徒の教育環境の充実に向けて(案)以下、府教委として審議されます。

土地確保や整備費を口実に学校建設には消極姿勢

「府教委案」では、今回の推計結果(10年間で約1400人増加)について、新校整備により対応すると、300人規模の支援学校を5校整備する必要がある」との現状認識が示されています。しかし、新校設置の適地確保の困難性に加えて、多大な整備費や時間を要するとの口実で、今回の検討に際しては、次の基本的な考え方により、さまざまな形で対応策を講じると述べています。

その「基本的な考え方」は次の3点です。
新校整備による対応は必要最小限にとどめる。
これまでの支援学校の教育環境における対応を重視し、できるだけ既存の支援学校の施設を活用する。
児童生徒及び保護者の教育ニーズをしっかりと踏まえた支援教育の充実や発展につながる取組みとする。

教育条件のさらなる悪化をまねく

「府教委案」では、支援学校の「新設」で対応する人数は、わずか600人程度にすぎず、将来推計で見込まれている約1400人の増加への対策とは言えません。残りの800人の増加については、特別教室等の転用、通学区域割の変更、「既存施設の活用」、「肢体不自由と知的障がいの併置校」、府立高校内に支援学校分教室の設置」によって対応しようとしています。この中で、府教委がまず手をつけようとしているのは、特別教室の転用と通学区域割の変更です。今でさえ、教室不足により子どもたちの学習に支障をきたしている深刻な実

一刻も早い学校建設を

大障教は、府立支援学校の「過大・過密」の解消には、府内4地域に続く学校建設が必要であると主張してきました。引き続き、大阪府学校教育審議会(1992年)が1500~2000人と答申した適正規模で、地域にねざした府立支援学校が適正配置されることをめざして、父母・教職員のみならずと力を合わせて運動をすすめる決意です。

「府教委案」の「実施スケジュール」

- 「特別教室の転用・通学区域割の変更等」(2018年~2022年) 400人程度
- 「肢体不自由と知的障がいの併置校等」(2019年~2022年) 250人~300人程度
- 「府立高校に支援学校「分教室」設置」(2021年~2025年) 150人~200人程度
- 「支援学校の「新設」」(2023年~2025年) 600人程度



米南部フロリダ州の高校で、17人が犠牲となった銃乱射事件から1週間後の2月21日、事件に巻き込まれた高校の生徒約100人が、州議員に銃規制の強化を訴えました。共和党が多数を占めるフロリダ州議会では、事件で使われたとされる殺傷能力の高い銃の使用を禁止する法案の検討を求めた、民主党提出の動議を否決したばかりでした。

米メディアによると、州議会前の集会には高校生に多数の大学生や教員も合流し、参加者は数千人規模に拡大しました。現地ではおよそ20年ぶりの規模だと報じられています。銃規制に賛同する人たちは、ネバ・アゲイン(悲劇はもう二度と起こさせない)を合言葉に、首都ワシントンをはじめ、ミネソタ・コロラド・イリノイなどで連帯のデモを行ったとのこと。

一方、ランプ大統領は、事件の被害者らを招いて行った意見交換で、特殊な訓練を受け、銃を隠し持った教師を学校に配置すれば、もはや銃の無い場所はなくなる」と発言しました。学校は非武装地帯だから狙われるという主張です。これに対して出席者からは、教師はすでに大きな責任を負っている。この上、人殺しの手段を手にするという恐ろしい責任を負わせるべきではない」とと反発の声が上がりました。

2月20日に公表された世論調査では、銃規制を強化する法改正に賛成する米国民は66%に上り、反対の31%を大きく上回りました。調査を行った米キーンピック大学は、この問題での調査開始以来、最も高いレベルだとコメントしています。銃に対する米国民の見方が、変わりつつあるようです。

支援学級は「安心と自信の場所」



第24回

大教組女性部教研

1月20日、第24回大教組女性部教研「輝いて！父母と手をつなぐ学校」が、たかつガーデンにて行われました。美しいバイオリンの音色で、さだまさしさんの「広島の空」などの演奏を聴き、参加者全員で「みんながみんな英雄」を歌って和やかな雰囲気になった後、岸和田市立山直北小学校で支援学級担任・特別支援教育リーダーングスタッフを務める田中元さんのお話「子どもが変わる…通常学級を支える山北小特別支援教育の役割」を聞きました。

だれが来てもいい教室に

田中さんが山直北小学校に赴任された頃は、「おまえようこやろ」と言って支援学級の児童をさげすむような子どもたちがいたそうです。特別支援教育が始まった時期でもあり、学校全体の意識を変えようと田中さんは、とりくまれました。

それまで学校の隅々にあった支援学級は隠れた存在でしたが、全校に「みせる」ことを意識し、職員朝礼で児童の様子を報告・共有することにしました。また、支援学級担任が在籍児童の通常学級に立ち寄って、教員が一人で抱え込まずチームで対応することや、支援



学級は児童にとって「普段から来ていて心地よいところ」であり、学校中の「だれが来てもいい教室」になるように変えていきました。今では「せんせい、オレもいんにいれてよ！」という児童がいるくらい学校に受け入れられているそうです。

〇〇ちゃんの専門家になりたい

田中さんは、支援学級の役割は「安心と自信の場所」であり、「いつでも受け入れてもらえる」ことを実感させてあげること、自尊心や自己肯定感が持てること、大切と述べました。ご自身にこだわっているのは、田中昌人先生から聞いた

「ウソをつくな」と子どもに教えるのであれば、大人が責任を持ってウソをつかなくてもいい社会を作ること。『人を傷つけてはいけない』と子どもに教えるのであれば、大人が責任を持って人を傷つけない、争いのない社会を作っていくかなければならない」というお話

また、専門性を身につけることはもちろんですが、「日々成長を見守っている〇〇ちゃんの専門家になりたい」とおっしゃった結びの言葉が参加者の胸に残る講演でした。

(女性部・荒木佳子)

全国障害児学級・学校交流集会に参加して(感想その5)

授業で使える内容が盛りだくさん

朝の文化バザールでは、理科実験での電気の授業の導入がとても印象に残りました。黒板で使うマグネットのついた電気が通ったことを判定する機械や、折り紙の金・銀紙で電気が通るか通らないか、またそれを確かめることなど、授業で使える内容がとても盛りだくさんでした。種の勉強でもアメリカセンダングサなど、学校にもはえているようなものを集めて図鑑を作るなど、楽しそうなお話が多くあったので、実践したいと思いました。

自分ももっと勉強しなければ

午後の強度行動障害の生徒へのアプローチでは、子どもの気持ちを考えて行動の意味をとらえたり、ダメと言われていたことをやってみてどう感じるのかを見たり、この子には何をすべきかあげられるだろうと考え続けることが大切だと感じました。

高等学校で通級による指導が始まること自体ほとんど知らなかったため、講座の内容一つ一つが勉強になりました。

や実践例を聞くことができ、有意義な時間でした。自分ももっと勉強しなければと思います。ありがとうございました。

(交野支援学校四條畷校分会 西尾隆太)

性教育のイメージが変わった

(交野支援学校四條畷校分会 小阪将輝)

千住真理子先生の講義を受講しました。千住先生の「学ぶと慎重になり自分も他人も大切にできる」「経験する前に学ぶと守る」との言葉が印象に残っています。

千住先生の講義を受けてイメージが変わりました。関わっている私たちが、正しい知識を伝えていかなければと思います。

(交野支援学校四條畷校分会 正田祐理)

